

それから あらすじ

1-3

目覚めた代助は畳の上に落ちたツバキの大輪を見た。寝ながら胸に手を当て、紅の血が流れる心臓の鼓動を確かめるのが癖だ。身支度に気配りし、朝食に熱い紅茶とバター付きパンを食べる。本を読み、音楽を聴いて暮らす若い独身の代助は、あの様に「遊んでいたい」と居候の門野から言われている。肉体仕事を条件に書生になったのんきで怠惰な彼との会話はいつも門野の口癖「そんなもんでしょうか」で終わるのだ。

4-8

中学からの知り合い、平岡常次郎が訪ねてきた。一時は親しく行き来していたが結婚し、銀行の京阪地方の支店に赴任した。近頃は疎遠になっていたが、代助には忘れるわけにはいかない事情があった。2人は大いに飲み議論し「贅沢な経験をしなくっちゃ人間の甲斐（かい）はない」と主張する代助に「何時までもそういう世界に住んでいられれば結構さ」と平岡は言う。そして支店長のために使い込みを穴埋めし、辞職・帰京に至った状況を語る。

9-13

代助は平岡から兄・誠吾の会社への世話を頼まれ、子どもを亡くした平岡の妻・三千代の様子を尋ねる。代助の父・長井得はかつて藩の財政整理に携わり、その後実業界で成功、代助の兄とその妻・梅子、その子・誠太郎と縫と暮らす。最高の教育を受けながら本家の金で暮らす代助に父は、三十過ぎで「遊民」とは「如何（いか）にも不体裁」などと説法するが、「職業のために汚（けが）されない」ことを上等と考える代助は適当にかわし、議論にもならない。

14-18

代助は兄嫁の梅子から、長井の家に因縁深い資産家の娘との縁談話を聞く。家中での斬り合いに巻き込まれた若き伯父、父が切腹を免れたのはその縁者の奔走による。そのような死に直面した話は代助には勇ましいより「怖（こわ）い方が先に立つ」。多忙な平岡に代わり、家探しを請け合った代助は書生の門野に適当な家を見つけさせた。明日引っ越しをするという。

19-23

引っ越しの前日、三千代が1人で訪ねてきた。色白に黒髪、二重の黒いうるんだ目が印象的だが、子どもを亡くしたあと心臓病を患い、それが悪化したわけではないのに血色が悪い。帰京前につくった借金の工面のため、平岡に言わ

れてやってきたのだった。青白い三千代を眺め、代助は「漠然たる未来の不安」を感じる。引っ越し当日は荷物の引き取りから荷ほどきまで門野を手伝いに手かせた。

24-27

シルクハットにフロックコート姿で園遊会に出かけた代助は兄に会う。常に多忙な兄と園遊会を抜け出し向かった鰻（うなぎ）屋で平岡夫婦の借金話を持ち出すが、断られてしまう。平岡の就職についても「そういう人間は御免（ごめん）蒙（こうむ）る」。兄弟の縁だけでは動かない兄を不人情に思う気持ちは起こらない。門野との間で、新聞連載小説『煤烟（ばいえん）』が話題になった。

28-32

代助は落ち着かない。連載小説「煤烟（ばいえん）」はためらう自分と主人公を比べてしまい、読み続ける気がしない。平岡の新居を訪ねると、三千代が荷物から平岡とそろいで仕立てたという赤ん坊の着物を取り出した。酒を飲みながら昔のように議論を始める。以前と違い代助はめっきをはがし真鍮（しんちゅう）のままでいようと心がけてきた。しかし平岡は、失敗しても働く自分を笑っている、考えるだけで意志を発展させることがない、昔とすっかり変わってしまったと代助を攻撃した。

33-37

一等国の仲間入りしたい日本、精神的にも健全でないこの社会で自分一人は何をしてもしょうがない、と言う代助に平岡は、生活に困らないからそう言えるのだと反論する。三千代は学友菅沼の妹で、代助と平岡は兄妹の家に遊びに行ったり、4人で散歩したりした仲だ。菅沼とその母が相次いで亡くなった後、三千代と平岡の間を取り持ったのは代助だった。平岡の事情はともかく、いま心細い状況の三千代のために、なんとか金の工面をしてやりたい気持ちが募る。

38-42

代助は兄嫁・梅子に借金を申し入れるが、断られてしまう。縁談話を嫌がる代助に梅子は、好きな人がいるのではと尋ねる。不意に彼の心に浮かぶのは三千代の名だった――。新聞で日糖事件が報道され、世間では大疑獄と騒いでいる。父や兄がまったく「神聖」とは思わないし、会社にも何が起きるかわからないが、いま代助が気にかかるのは三千代のこと。金策の返事を聞きに1人で訪れるのを心待ちにしていたが、音沙汰がなかった。

43-47

兄嫁からの書状に二百円の小切手が同封されていた。代助はすぐさま平岡宅へ向かう。三千代から平岡の道楽、高利な借金がもとの現在の苦境を聞いていると、経済面だけでない夫婦の関係がうかがえた。数日後、平岡が訪ねてきた。新聞社への就職を考えているという。代助はいまの平岡に嫌悪感さえ感じている。三千代に平岡を周旋したのは自分だ。後悔はしていないが、3年を経てその結果がいま平岡と自分の前にある。代助はまた父から呼び出しを受けた。

48-52

「来たか」、父は穏やかに今後の心づもりを尋ねた。独立も洋行も、父の前提となるのは資産家佐川の娘との縁談だ。そんなにその娘をもらう必要があるのかと問う代助に父は、嫁を持たせるのは親の義務、佐川の娘でなくてもいい、こちらの都合も少しは考えたらいいだろうと怒りをあらわにした。代助は三千代の来訪を心待ちにしていた。昼寝中の訪問を知り、なぜ起こさなかったかと門野に怒りを向けるが、すぐに戻ると聞いて機嫌を直す。

53-56

待ちわびた三千代が大きな白いユリを提げ、息をはずませてやってきた。水を取りに行き、戻ってくると、三千代はすでに水を手にしていた。スズランをつけた大鉢の水を飲んだと聞き、代助はあきれれる。ユリは代助に買ってきてくれたものだという。兄の生前、代助がユリを買って訪ねたことを三千代は覚えていた。平岡は来月から新聞社勤務が決まったらしい。代助が用立てた金で借金返済せず、生活のために使ってしまったと三千代はわびた。

57-61

アンニュイに襲われたらしい。自分は何のために生まれたのか、行動の意義を疑い、代助はぼうぜんとなる。自分を救う方法はただ一つ「やっぱり、三千代さんに逢（あ）わなくちゃ」。出がけに友人の寺尾がやってきた。文学を職業にしており、請け負った翻訳で分からない点があるという。結局、平岡宅へは行けなかったが、実はその前、平岡夫妻には数回会っていた。平岡は新聞社の経済部主任記者に決まったという。朝、突然、青山の実家から人力車で迎えが来た。

62-66

実家に呼ばれたのは兄嫁の歌舞伎見物のお供のためだったが、遅れてやって来た兄から幕あいに紹介されたのは佐川の娘だった。兄嫁でさえそう振る舞うな

ら家族と疎遠にならざるを得ない……。考えがまとまらない中で三千代を思うと安住の地を見つけたように感じる。変わらぬ愛を口にするのは偽善と考えるが、三千代を思うとその信念も揺らぐのだ。兄嫁の圧迫、三千代の引力……代助は旅に出る決心をする。おいが父の使いでやってきた。明日実家に来るようにと言う。

67-71

旅に出る心が定まらないまま、代助の頭は三千代のほうに滑っていく。訪ねると三千代はランプの下、1人新聞を読んでいた。暮らしぶりを尋ねると指輪のまったくない手を見せた。代助はためらう三千代に紙入れの紙幣を渡す。翌日、佐川の娘を招待したので来るようにとの父の命令を伝えに兄がやって来た。旅に出る金もなくなり、実家に行かざるを得ない。佐川の娘は薄紅の頬に大きな目、華やかな印象であるが口数少なく、芝居や小説の話題にも関心を示さなかった。

72-75

佐川の娘の品定めが済み、父はこの縁談が決まったも同然のようだ。数日後、父の命令で代助は彼女らを駅まで見送りに行く。父と絶縁すれば財源が途絶え、残るのは自然の愛だけだ。代助は落ち着かず、赤坂の待合で一晩過ごす。翌日また三千代に会いに行ってしまう。三千代はタンスの中から、昔代助が贈った指輪を見せた。先日のことは平岡に話していないという。夫に対し三千代を罪人にしてしまったが、平岡に責任がないわけではないと代助は思った。

76-80

平岡と三千代との間を取り持ったことを代助は後悔した。三千代になぜ奥さんをもらわないのかと聞かれたが、考えれば三千代と自分の間に愛が通わなかった時期はなかったのだ。経済的窮状を心配し、平岡を新聞社に訪ねた。社会の内情に接する仕事柄、代助の家の会社の内幕も書けるとにおわせる平岡に一種の憎悪を感じる。平岡は、三千代は三年前とは大分変わった、家に帰ってもおもしろくないという。そんなに家が嫌なら奥さんを取っちまうぞと代助は知らせたかった。

81-85

天意にはかなっても、人の掟（おきて）に背く恋は主人公の死で初めて社会に認知される。その悲劇を思うと恐ろしい。しかし、自分が縁談を受け入れ、既婚者になったとしても、それが三千代との間を隔てるものとはならないだろ

う。代助は縁談を断ることに決めた。実家で接客中の父を待つ間、日本中捜しても好きな人なんていないのだから、家族の薦めで結婚すれば丸く収まるという兄嫁に、代助はついに「私は好いた女があるんです」と言い切った。

86-90

この日父に会えなかったが、次回のために代助は心を固めておきたかった。大きなユリをたくさん買って部屋に生け、三千代を呼びにやった。「何か御用なの」と問う三千代に、彼女の兄・菅沼が存命中の頃を思い出すためユリを用意したと話す。菅沼は妹をかわいがり、趣味の分野の教育を代助に任せた。三つどもえの関係が一つになる直前で1人が欠けバランスが崩れたのだ。この5年間を語り合い、「僕は、あの時も今も、少しも違っていやしないのです」と告げた。

91-95

「僕の存在には貴方（あなた）が必要だ。どうしても必要だ」とたたみかける代助に、三千代は泣いた。なぜ捨てたのかと問い、「残酷だわ」とつぶやく。世間的には罪でも、三千代の前にぎんげでできることが代助はうれしかった。平岡を愛しているのか、平岡は彼女を愛しているのかとの問いに答えはなかったが、不安も苦痛も消えた表情で「覚悟を極（き）めましょう」という三千代に代助は震えた。戦う覚悟を決めたら、代助は一日も早く父に話したかった。ようやく父から連絡が来た。

96-99

実業の不安定さから地方の大地主との縁組の必要を説く父を気の毒に思ったが、代助は断る決意を伝えた。理由を問う父に答えないまま、ついに父からもうおまえの面倒をみないと宣告される。援助が断たれれば生活のために職業を探さねばならない。自分が精神の自由を失う状況に三千代を道連れにすれば、その美しさを曇らせてしまうかもしれない。「貴方はそれほど僕を信用しているんですか」、改めて問う代助に、信用せずにこうしてられないと三千代は答えた。

100-104

実家の援助を失えば物質的な責任を果たせないという代助に三千代は、死ぬ覚悟がある、殺されてもいい、長く生きられる身体ではないのだと声を上げて泣いた。代助は平岡に会わねばと手紙を出したが、一向に返事がない。様子を聞きにやったところ、三千代が病気だという。翌日平岡がやってきた。会社を休んで看病していたが、病床の三千代が涙を流し、謝らなければならないこと

がある、代助にそのわけを聞いてくれと言う。君の用事と関係があるのかと平岡は尋ねた。

105-109

代助は三千代との経緯を話し、平岡の制裁を受ける覚悟を伝えた。それならなぜ3年前に取り持ったのだと平岡は声を震わせ、彼より先に三千代を愛していたという代助の告白にぼうぜんとする。平岡は代助に三千代を「遣（や）る」と言うものの、病気が治るまでは訪問を禁じ、彼女の亡きがらだけを見せるつもりかと代助は取り乱す。平岡から父に宛てた手紙を持って、兄が訪ねてきた。書いてあることは本当だと認めると、なぜそんな馬鹿なことをしたのだと兄はあきれた。

「それから」 相関図

- 登場人物のイラストをクリックすると、人物紹介がご覧になれます

職に就かず、実家に金を無心しては裕福な生活を送る独身青年の代助。旧友の平岡と妻三千代が東京に戻ってくる。かつて愛した女への思いを、代助は再び募らせていく。

